

つなげたい。水と緑の120年。



文政8～10年制作、佐藤守一家所蔵の古地図。下の現在の地図とほとんど変わっていません。

1889年、明治政府の元、町村制が施行されたのに伴い、「道志村」による自治権が施行されました。2009年は、村が施行されてから120周年にあたります。村の93.8%が山林であり、四方を山で囲まれ、東西七里の細長い形の道志村は独特の文化を有してきました。120年の間に苦悩と努力によって飛躍的な進展を遂げて現在の道志村になりました。豊かな自然に恵まれた道志村は縄文時代から多くの人々が暮らしてきました。昨年度から始まった埋蔵文化財発掘調査でも村内各所から土器や石器が発見されました。



特に縄文土器が出土した「神地遺跡」では、1960年には「縄文の女神」と名付けられた顔面把手付土器が発見されている。「道志」の名前のいわれである検非違使が平安時代領地を治めていたこと。明治5年道志を旅して「まるでスイスのようだ」と書残した、イギリス外交官アーネスト・サトウ。今年開港150年を迎える横浜は、明治30年に道志川を横浜水道の水源とし「赤道を越えても腐らない水」として名声をはせたことなど、先人は多くのことを残してきました。このすばらしい自然環境を永遠に守り、今年光ブロードバンド・コミュニティに生まれ変わります。



古い洋画でおなじみの獅子頭共用栓。明治の中期に横浜市がイギリスから輸入していたが、道志村との友情シンボルとして昭和57年に寄贈された。120周年を記念してこの水道栓のレプリカを道の駅どうしへ設置。

明治時代
道志を旅した
アーネスト・
サトウ



『日本旅行日記』(平凡社)より
アーネスト・サトウの肖像

6.16 [火] 歴史資料提供公募締切り

懐かしい道志村の古い写真を探しています。先人たちの歩んだ足跡を展示いたします。たくさんの応募をお待ちいたします。



大正4年両国橋の吊り橋完成



昭和の道志小学校



昭和の道志風景



大正の道志小学校卒業式



幕末・明治期に、「富士山を眺める十日間の旅」の記録を残したアーネスト・メイソン・サトウの記録の中に、「道志谷」が登場する。V字渓谷に点々と集落が続く道志村は、「道志七里」といわれてきた。ここでサトウは、山中湖から道志に入った。「魅力的な景色がいくつか見られた。一つは渓谷を見下ろす美しい眺めであり…」と。「私が日本ではまだ目にしたこともない、非常に美しい景観が見られる」と述べ、「大室指山という山を半分ほど登ったところで、谷の反対側に大室指がスイスの風景のような具合に見えた」と記録している。

道志の地名は検非違使の官職名

「道志」の地名は、いつどうして生まれたのか。平安初期「検非違使」という職で今の裁判官と警察官とを兼ねた強力な権限が与えられていた。明法道院を卒業した者は、「志」に任じられ、検非違使を兼ねる者を「道志」と呼んでいた。その検非違使が甲斐国の山峡に入り、道志の姓をもって領地を治めたのである。ここから道志の地名が生まれた。